

因果律

部長 加藤敏弘
(2004.12.7 執筆)

「なぜ? どうして?」という問いかけは、私が子どもの頃に好んで読んだ本の題名です。「なぜ、牛乳瓶に水を満たして水が溢れようとしているのに、こぼれないのだろう?」など、日常生活のあらゆる事柄に疑問を持たせようとしていました。子どもたちの興味や関心をサイエンスに発展させるために最も重要な問いかけです。

私たちは、試合に負けたのはなぜだろう? とその原因を追及し反省します。これは、試合に負けたという結果とは異なる結果(すなわち試合に勝つこと)を目的にして、明らかになった原因を取り除く、あるいは違う方法で行うなど、原因を手段として練習に取り入れるためです。ビデオを見て試合を振り返りながら、時にはデータをとって分析をする。こうした行為はいかにも科学的ですが、現役プレイヤーは分析結果を踏まえて、同じ結果を招かないような工夫を練習に取り入れているのでしょうか?

バスケットボールのコーチは、試合の真っ最中であってもベンチの前にプレイヤーを呼びつけて直接指示を与えることができます。したがって、コーチは試合中大声を張り上げながら、プレイヤーに指示を出すことが多いようです。もちろん、この私も例外ではありませんでした。

しかし、他の競技を経験した人は、バスケットボールの試合会場に来て、まず初めにこの怒鳴り声にビックリします。ましていわんや、我が子を怒鳴りつけているとなればなおさらです。バスケットボールのコーチは、こうした半ば習慣化していることをもう一度見直す時期に来ているのではないのでしょうか。

カントは、「自然の因果性と自由の因果性とを区別し、因果法則の普遍妥当性を現象認識の範囲でのみ保証するとともに、本体としての人間の意志の自由を主張した。」自然現象や社会現象について、その原因を追及することは非常に有用ですが、人間の意志や行動については必ずしも当てはまらないのです。ある人を好きになった。「なぜ、どうして?」と問えば、いろいろと理由を並べることはできますが、どれもこれも後から考えたもので、本当のことは本人にもわからない。好きなものは好きなのです。

なぜ、ノーマークのシュートを外すのか? なぜ、マークマンを見失うのか? コーチは試合中に、その原因をいちいちプレイヤー本人に問いただす必要があるのでしょうか? 原因を追及するのは、違う結果を導くための手段として使える時だけです。ただでさえミスをして焦っている本人に「なぜ? どうして?」と問うことは、結局、悪者探しをしているに過ぎません。プレイヤー自身もミスをした後に「なんでだろう? どうしてだろう?」と自問してばかりいても始まりません。時には熱くなって審判やベンチのせいにするプレイヤーもいますが、結局、悪者探しです。

大声を出しても構いません。しかし、その声は、原因追及のように過去にさかのぼるものではなく、すぐ次に起こるであろう将来に向かっての建設的な意思表示であることが大切です。人間の活動は、因果律には支配されません。もっと自由に。創意工夫を。